

# 博士論文要旨

## 論文題名：坂口安吾初期文学研究 —— 〈仏教〉と〈笑い〉を中心に——

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程

チン ギョウシ

CHEN Xiaozhi

本論は、主に仏教的な要素と〈笑い〉の要素を共に取り扱う小説「黒谷村」、「村のひと騒ぎ」、「禅僧」、「閑山」、「勉強記」を研究対象とした。対象作品の鑑賞を第一義に、緻密に言語（表現）の多義性や重層性を考察してきた。人物造型と作品の構成を分析して、作品の主題や作者の意図を究明する作業を行ってきた。さらに社会・時代背景、文壇の状況に即して、他の作家（・作品）との受容関係を探りながら、安吾の文学観の独自性を浮き彫りに試みた。最後に、研究対象の位置付けを問い直した。

第Ⅰ章では『黒谷村』を取り上げた。人物造型にある知識人という側面を重視して、龍然と凡太の人物造型を考察した。続いて自殺した男の話の内実を考察して、さらに『黒谷村』と萩原朔太郎の「死なない蝟」、倉田百三の『出家とその弟子』との受容関係を考察して、『黒谷村』を書いた安吾の問題意識を明確にすることを目標とした。

第Ⅱ章では「村のひと騒ぎ」を取り上げた。先に言葉表現と構図の方面から〈笑い〉を抽出して、作品における〈笑い〉の多様性、重層性を明らかにした。次に「理知」を重視する〈笑い〉の時代風潮に反して「空想」を誘う〈笑い〉、「感じる」ことを重視する安吾の〈笑い〉観の内実を考察したうえ、井伏鱒二や中村正常が代表する「ナンセンス」文学との違いを明確にして、安吾の〈笑い〉観の独自性を究明した。さらに「生き返し」（仮死）という要素を取り入れたことを切口として、安吾におけるエドガー・アラン・ポオへの受容のありようを明らかにしたうえ、全体的に安吾の芸術観を考察した。

第Ⅲ章では「禅僧」を取り上げた。まず安吾における「気候」と「理知」の捉え方に基づき、「若者」の人物造型を考察した。続いて、お綱の人物形象とお綱にかかわる性的表象の背後にある仕掛けを考察した。さらに医者的人物造型から見られる性的問題を分析して同時代の「デカダンス」と「モラル探求」との関連性を明確にした。そして、社会背景に注目して「知識階級」に関する言説と安吾における「デカダンス」と「アンモラル」（「無道徳」）といった思索に敷衍して禅僧の人物形象を考察した。最後に〈問わない語り方〉と説話体の効用を分析し、作者の意図を明確にした上作品の位置づけを行った。

第Ⅳ章では「閑山」を取り上げた。狸の滑稽的な形象や、〈和尚〉と〈放屁〉の組み合わせや、屁の視覚的な表現などに焦点を当てて、「閑山」にある「滑稽味」は如何に成り立っている

たか、そして、「滑稽味」を取り扱う作者の意図とは何であろうかを、「日本の山と文学」（「信濃毎日新聞」20575～20578号1939.8.16～19）を照らし合わせて明確にした。最後に作品における禅的表現に着目して、「「花」の確立」（「読売新聞」第22198号第1夕刊1938.11.15）を手掛かりに、「花の文字」の意味や作品の主題を明らかにした。

第V章では「勉強記」を取り上げた。まず、作中人物栗栖按吉による〈笑い〉と語り手による〈笑い〉を分析して、作品における〈笑い〉の要素を引き出し、安吾の〈笑い〉観念——「FARCEに就て」（「青い馬」第5号、1932.3）と比較したうえ、「茶番に寄せて」（「文体」第2巻第2号、1939.4）に照らし合わせて、「勉強記」の〈笑い〉の独自性を考察した。続いて、未だ十分に追究されているとは言い難い時代状況を手掛かりに、「主義者」という人物特徴の持つ意味を分析して、主に按吉が「悟り」への執着と放棄の過程を分析して、栗栖按吉の人物形象を緻密に考察して、作品の主題と作者の意図を明確にした。

最後の結章では、まず考察してきた前の5章の成果をまとめた。続いて安吾初期文学における仏教的なもの、〈笑い〉ものの作品の共通性とそれぞれの独自性を明確にし、研究対象の文学価値と位置づけを改めて検討した。最後に本論の不足をまとめ今後の課題を明確にした。